

## 『アメリカ大都市の死と生』

ジェイン・ジェイコブズ著 (山形 浩生 訳)  
鹿島出版会、2010年 (原著1961年)

### 机上の計画が都市を殺す

都市論のバイブルとしてこの50年もの間色褪せない本書ではあるが、恥ずかしながら私は現部署に来るまで全く知らなかった。西区に来て、まちづくりを担当するにあたり、上司から紹介された本である。

読み始めてみると、昔の話であるということとアメリカという国の話であるということ、共感できない部分も多々あった。そのまま私たちの街に当てはめるにはかなり違和感を感じるかもしれない。

しかし読み進めていくと、なるほど私が普段抱える課題がそこに書かれていた。

本書は、当時の都市計画・再開発論を痛烈に批判している。当時の都市計画論とは、こうだ。都市の中を区分けして用途規制し、街区ごとに土地利用をこうするべきと定義づけ、定義にそぐわないコミュニティが存在する場合、むしろそれを壊す必要があり、開発者が理想とした都市計画・開発をしていく。とりあえず公園を作り緑ささえ植えれば、何となく憩いの場として、そこに人は集まるであろうといった発想である。

本書では、こうした計画に基づく開発の結果、皮肉にも

廢れていく都市について、実際の街やそこに息づく人々を例示しながら、机上の計画が都市の多様性を殺すことになると論じている。

頭の中だけで考え、実際に住み働く人々を見ていないのだから、そんな考えは駄目で当たり前だと誰もが思うかもしれない。

しかしながら、現在の横浜市を振り返ってみると、あながち他人事でもない。施策・事業は、局中心に展開されており、分野別に検討・実施されるが、都市の用途をバラバラに考えてはいないだろうか。住民の声を吸い上げている現場としての区の意見・考えを真剣に受け止め、局事業に生かしていくことで、分野別に検討し事業を実施していく局と実際に街を見て面的に捉えている区の双方が存在することに横濱市役所が成り立っている意味が出てくるのだと思う。物事を縦軸と横軸から検討する事が出来る政令指定都市ならではの強みである。局に居た時は気付かなかったが、区に来てみると局では区に対する意識が希薄だと感じる事が間々あり、政令市の良さが活かせていないのが現状ではないか。

### 交差が都市を活性化させる

さて、本書での都市論に戻

ろう。都市の治安を保つには、そこを監視する目が必要であり、様々な時間帯に人が居ることが必要となる。それには、都市に人々を惹き付ける多様なニーズ充足の場が必要であり、住む人、働く人、遊びに来る人などが、個々の事情により複雑に都市を交差したり、交流することで成り立つのである。多様な商業経済活動などにより、訪れた住民、就業者、来街者が、必ずしも意図せざる形も含めて人目を提供し、都市の治安を保つ。それがさらに都市を活性化することになり、都市は発展していく。

西区のみなどみらい21地区(MM地区)に住居街区を計画したのも、本書の影響があったかもしれない。ただし、本書では様々な人が交差するために住宅地と商業地は混在するべきと唱えている一方、MM地区では明確にエリア分けがされている状況ではあるが。

MM地区の次のステップは、住民と就業者、来街者をどうやって交流させるかである。

一昨年にこの地域での連合自治会が発足し、時を同じくして各企業の垣根を越えて活動するインフォーマルな団体も発足している。こういった現場主体で発生しているつな

がりづくりを、横浜市として局と区が互いにその特性を活かしながら支援していくことが、街の発展につながるべくに違いない。そのためにも、局は区から届けられる現場のニーズを真摯に受け止めるべきである。

都市の本質とは、互いに知らない人が集まって、過干渉にならない適度な人々の関係を築けることであると著者は言っている。

西区で進めているまちづくりの取組も、この概念と似ており、今回の東日本大震災で気付かされた、いざというときに助け合える「災害時にもいきる日頃からの顔の見える関係づくり」を、地域と一緒に推進している。深い仲で付き合わなくとも、挨拶程度の関係を築いておけば、いざという時に心強い助けとなるのである。

近い将来、横浜に大地震が発生する可能性は、かなり高いといわれている。日頃からの「ゆるやかなつながり」づくりが、今の横浜には不可欠であり、人のつながりがどのよう形成されていくのかを理解する第一歩として、本書が役立つのではないだろうか。

△西区区政推進課  
企画調整係長 土屋 朋宏